

## ともづれ 市民派女弁護士vsヤドカリ家族——無料体験版

【共連れ（ともづれ）】とは、マンション業界、セキュリティ業界の用語であり、マンション住人がオートロックを解除して入場する際に、不審者等の関係者以外が関係者を装い、背後等につき、連続して入場してしまうことを言う。

### 001. プロローグ

くたびれたスーツ姿の女はマンションの部屋に帰宅すると、防犯のために全開してあったブラインドを床まで下ろした。

その1LDKは三階で、夜景など楽しめる小洒落た高層にはないし、ロケーションも場末の駅裏だ。

寝に帰ってくるだけの現状から逆算して見つけたような賃貸の物件だから仕方がなく、一刻も早く着替えたいと、意識はそればかりに向いている。

丸十日間、ほとんど洗濯することもできなかったのだ。百均雑貨に毛の生えたていどの調度品が数点あるだけの、リビングルームに置かれた黒革リクライニング・チ

エア——そこそこ勢いをつけて買った唯一の物——女は舌打ちしながらそれへ目かけ、灰色のジャケットとスラックスを脱ぎ捨てた。

汗のしみこんだブラウスのボタンも、さっさと外して両肌を見せていった。

ベージュ色のボディスーツ？！

こんな下着は中年女が太り肉の補整ついでに使えばいいたぐいで、彼女のような手足の長いプロポーションには不似合いを通りこし、まるでコントの衣装だった。一日の睡眠時間を三四時間にまでけずり、馬のごとく働きつづけなければならない仕事を選んでいなかったら、ブラやショーツに関心を配る気もすこしは起きたかもしれないが、今やそんな乙女の色気は別世界の出来事。ワンピースタイプのほうが、洗濯や収納の手間を1/2に省けるだろうという涙ぐましい胸算用がショッピングの中心である。

向日葵のバッチを襟につけた『弁護士』——仲村亜矢（ナカムラ・アヤ）の生業がそれだった。

ポニーテールをほどいた髪が、首すじから肩さきへ、二の腕のなかほどまでへ垂れかかった。

まっすぐな毛筋と涼やかな素肌は、たがいの艶を引き立てあうようだ。

このロングヘアーはたしかに『女』を意識するシンボルではある。仕事女の勝手からすれば短髪にするのが常套なのだ——大学講師をやっている姉の亜弓（アユミ）がその典型例。ちなみに1/2大作戦も彼女からの伝授——が、そこまで『女』を捨ててしまっても良いのかどうか……。姉とちがってまだ未婚であるし、性欲もいたって健康的である。しかも携わる案件によってはこの種の『フェロモン』が有利にはたらく場合もある。

卵形の容貌を、下ろした髪に縁どらせ、いつも伶俐冷徹にひきしまった眉間を柔和にゆるめて微笑めば、正規のルートでは入手困難のはずの情報も、あっさり転がりこんできたりする。爽快なスキルとはいえないが、亜矢はそれを『マリーシア』だと割り切っていた。現代の女性弁護士が克服しなければならない数多くの障壁は、書生論だけでどうにかできるものではない。

（マイナスになっちゃうケースもあるんやし）

亜矢は苦虫をかみつぶした表情で雑に頭をかき、そのまま浴室へ行ってシャワーをすませた。

キッチンへもどるなり冷蔵庫をあける。

缶ビールが一ヶ、残っていたはずだという記憶の正しか

ったことに安堵し、さっそくリングをはがすと、彼女はかなりの量を一気に飲んだ。

真っ白なバスローブにつつんだ細身へながれこんでいく冷たい液体……。

炭酸のホップが臓腑を弾ませる。アルコールが血管を押しひろげていく。

——今回の出張はタフだった。

ある地方自治体の外郭団体における集団セクハラ事件の被害者救済活動。

これが案件である。

002. 二人で69の押さえ込みを作ったら、ゴロゴロ転がりつつのクニニは定番やんか！

亜矢の所属する法律事務所はO市にあるが、その町はO市から電車やバスを乗り継いでたっぷり五時間はかかる、暗い海に面した半島の、行き止まりのような突端の土地に存在した。組織ぐるみ、もっといえば地域ぐるみのセクハラ行為は、当町の風土においては伝統儀式のごとく日常的にはびこっており、なんら違法性の認識もな

く、被害者で依頼人であるA子を精神的かつ身体的に侮辱および陵辱したのである。A子は地元出身ではあるものの、大学からは都市部へ移動し、大手商社での勤務を経験したのちに帰郷したという経緯もあり、旧弊な男尊女卑文化に迎合できず、勇気をもって職場でのセクハラを告発した。すぐさま始まった恫喝と懐柔による隠蔽工作は、A子がこれに屈しないとみるや、減給や降格、あるいは配置転換を露骨に威迫するといった不当弾圧へと過熱していく。職場だけでなくプライベートの部分でも嫌がらせが横行した。盗聴盗撮、無言電話、罵声電話、中傷ビラ、尾行・・・連日連夜おこなわれるそれらは丸っきり不法行為のはずなのに、役所等がA子の相談にじゅうぶんな反応を示すことはなかった。町ぐるみとっていい圧力だ。ほどなくA子はノイローゼ寸前に追いこまれる。孤立無援の状況を何とかするためには、外部から援軍をつのるしかあるまい。思い立った彼女は、学生時代からのつきあいで、現在は社会学部で講師をつとめる友人に連絡をとった。その友人こそ亜矢の姉である亜弓であり、亜弓はただちに弁護士の妹を紹介したのである。

(おっ、ツナ缶もあるやん！)

リビングとおなじくらい隙間だらけの冷蔵庫の奥に、平

べったいブリキの缶が蓋のあいた状態で放置されていた。仕事女はこれを完全に失念していて自嘲するしかない。おそらく亜弓の娘である姪っこが遊びに来た時、なにかの料理にもちいたものの残りと思われた。姪の碧子（ミドリコ）はツナサラダが好物だった。

『スゴイね。亜矢おばちゃん、料理もできるんやね』

『なに言うてんの。スーパーレディに失敬やる。こんな朝飯前に決まってるわ』

『でもうちのママはパパにやらせてるばかりだよ』

『アハハ、不肖の姉が申し訳ない。しかしまあ、パパがやれるんならそれはそれでノープロブレムやな』

母親ゆずりのパッチリとした瞳をもつ姪と、そんな楽しい会話をした覚えがある。亜弓の夫、本馬忠彦は専業主夫ではない。亜弓と同様に大学で講師をしている。どちらか手の空いているほうが料理当番になるというシステムのはずだ。娘にとっては友達の家では見当たらない自分の母親の生き様が、とにかく印象的なのだろう。碧子は利発な娘だがフェミニズムを洞察するようになるにはあと何年か成長が必要だった。亜弓は本馬と同等、もしくはそれ以上の実力と将来性をもった学者である。ツナ缶の料理を作るためにキャリアを放棄するなんて空虚にすぎると考えるのは、仲村家の女たちには自明の理なの

だった。

その姉から回ってきた話だし、内容も内容だから、亜矢は担当を引き受け、すみやかに半島の町へおもむいた。のべ九十日余、最終盤は連続十日間となる現地入りのスタートである。

セクハラ事件は弁護士業務のうちでも得意分野だと所属事務所のホームページに記載しているくらいで、じっさい経験件数もおおかった。一人でもじゅうぶんに闘える自信があり、もし裁判に発展するような事態になれば、そのときには先輩弁護士の助力を仰げば事足りるだろうと踏んでいた。弁護士過疎地域の一地方都市へ、最初から大弁護団を組織して乗りこむのは得策とは言いがたい。

しかし旧態依然の半島社会においては、大弁護団どころか、弁護士一人の落下傘降下であっても、甚大な刺激となったようだった。若手であり、女性であり、そして垢抜けた容姿の持ち主という亜矢のすべての要素が彼らの文化に対する『挑発』として捉えられたわけだ。

(フェロモンは諸刃の剣やからね・・・)

リビングのチェアに胡座をかき、ツナ缶を肴にしはじめた亜矢は、タオルを巻いた頭部をおさえつける。濡れた

髪はいまにもそこから溢れ落ちてきそうだ。  
たとえばノースリーブの黒いパーティドレスでも身につければ、一挙にエキゾチック性へと振り切れるのだろう  
ワンレングスのそれ——弁護士であろうが何であろう  
が、こんなに魅惑的な黒髪をなびかせた女であれば、彼らが性欲の対象としないわけもない。おなじ女のその口から、生まれて初めて聞くような法律用語や女性の人権などという高邁な哲学がとびだしてきても、ニヤニヤするばかりで真面目に相手をする気など最初からないのだった。

『オネエーチャン歳いくつ？』

『鼻の下に産毛が生えてるぐらいだからまだ初心だね？』

『男女同権？ そんなもん、アイドルがウ×コをしないってのとおんなじ。ファンタジーでしょ』

『女は赤ん坊を産めば、赤ん坊に合わせるために、頭の回転がトロくなるように仕込まれてんだから』

『男には逆らえても神様には逆らえんのだからさ、オネエーチャン！』

セクハラを訴追に来た法律家に対してもこの集中砲火。理性を保つのに一苦勞してしまう。

『地上戦』がことほど左様なアリサマだとすれば、活路



を『空中戦』に見いだすしかない。『フェロモン』を小出しにつかい、マスコミに露出して、案件を宣伝し、

『男＝悪 女＝善』という簡略化した図式をひろめ、A子に同情する世論を喚起して膠着した状況を打開していかうとする戦略だ。世論が傾けば行政や司法当局の重い腰を上げさせやすくもなるだろう。

『ええ、本気ですよ。じっさいテレビのワイドショーのプロデューサーとは懇意やし、新聞社にも友人が多くいますからねえ。脅し？ まさか。だけど、統一地方選挙、そろそろですよ。 は？ 脅しじゃないって』

完全な脅しである。

男どもの貼った『美人弁護士』というゲスなレッテルが、逆に『説得力』となって彼らを恐慌させた。この才色兼備のスケならマスコミも面白おかしく取りあげる可能性が高い。当然『悪玉』にされるのは、むくつけき男の側に決まっている。

『ざけやがって！』

口々に『女の武器』への憤りを発する男ども。

無表情をとりつくろったが、今度は亜矢がニヤニヤする番だった。

(いやいや、なに言うてんねん。おたくらは本当に弱い者イジメの悪党なんやから、そんなん逆ギレやる)

このくらいのお灸は一般常識の範囲内だと亜矢はうそぶき、A子へ向けられていた陰湿な中傷攻撃が自分に照準を変更してきても、それもまた作戦どおりと、してやっつたりのドヤ顔だ。すこしでもA子のノイローゼが軽減するなら、弁護士としては本望ではないか。下ネタのヤジを浴びせられたり、デマばかりのビラを撒まかれたりするくらい、蚊トンボの水鉄砲とおもえば痛くも痒くもない。

こうした『空中戦』のおかげで形勢逆転、とまではいなくても、相手を土俵中央まで押しもどすことには成功した。与太話や猥談の場だった交渉の席に、緊張がもどろり会話が成立しはじめた。

亜矢がつぎに画策したのが当局へのアプローチであったが、こちらも予想どおり胃に穴が開きそうな神経戦の連続だった。半島社会と土壌を通底する小官組織は、被害の申告すらなかなか受けつけない傲岸不遜ぶりなのだ。しまいにはこう発言する始末である。

『お辞儀、お辞儀！ 丁寧に頭を下げて、お願いしますと礼儀を示さなきゃ、受けとれないよこんなもん』

ゲップ！

やはり空きっ腹にビールはキク。

亜矢はツナ缶の最後の塊を割り箸で綺麗にこそぎとって口へ放りこむ。

小娘扱いして怒らせ、自分から席を蹴って出て行くように仕向けるといふ、もう稀にしか見られなくなった田舎役人の手管——明晰な頭脳ばかりでなく忍耐強い心臓もあわせもつ気鋭の弁護士がそれを叩きのめすのは簡単だったが、彼らの夕子の悪さは、美女の口角泡をとばす姿を目の保養にもするという二段構えの変質性にある。薄気味悪い視線が顔や肉体へ注がれている事実には気がつかないわけはなかった。窓口をたらい回しにされるたび、一からおなじような不条理が繰り返されるのだからたまったものではない。

(上等や！)

ならばと亜矢も腹をきめ、フロントの前のソファに陣取り、かたわらにコンビニ弁当を十個、積みかさね、膝の上にはノートパソコンを置き、耳にはiPodをさしこみ、仕事場をここに移して『順法闘争』に突入する。三

十分ごとにはフロア全体に響き渡る声で公的機関の待ち時間の長さを糾弾する『演説』をぶったりする。『演説』といっても漫才のようなものだから一般利用者の爆笑を誘うことおびただしく、すっかり人気者の陽気だ。連中は知らないのだから仕方がないが、亜矢は学生時代、落語研究会で副代表を務めたツワモノだった。

けっきょく壮絶な消耗戦に勝利したのは、またしても『オネエーチャン』であった。

手続きが完了してしまえば、事はやはり動かざるをえなくなる。それが行政組織というもの。なにしろサーベイランスしているのは『全国区クラス』の手練れなのだ。形だけでも動かさないと、どんなしっぺ返しが飛んでくるかわかったものではない。

つまるところ、すこしでも山が動けば河の流れも変わる。木々の茂りも変わり、鳥のさえずりも変わるだろう。

消耗戦を境に、あきらかにA子や亜矢への中傷攻撃が下火になった。

同時に、示談交渉の攻守が入れ替わった。

訴訟の提起はお互いの切り札だったが、どちらかといえればこれまで、向こう側がイニシアチブをとっていたといえる。

裁判となれば相手次第で長期化するケースもあるし、経

済的な負担もかかる。鬪いが泥沼化し町に住めなくなってしまう恐れもある。できれば避けたいのはA子の側だった。そうしたこちらの足元をみて、連中はどこか高をくくっている様子があった。

だがここに至って、裁判を敬遠するムードに包まれているのは連中のほうである。都会から来た、青二才の、可愛い顔をした弁護士が、当初の見込みに反して、きわめて有能な実力をもっていると認識せざるを得なくなったからだ。それもまともな有能さではない。『超』がつく『凄み』のある有能さ。あいつが相手では裁判に勝利するなんて到底困難だろう——亜矢のパフォーマンスを日々見せられるにつけ、彼らに厭戦気分がひろがっていったのもうなずける。

組織的なセクハラ行為の事実を認定し、A子の失った社会的地位の回復を約束し、全面的に謝罪する旨の示談が成立したのはそれからまもなくのことだった。

多額の慰謝料こそ妥協してやったが、ほぼ満額回答の答案だ。

これはファンタジーでも絵に描いた餅でもない。拘束力のある厳然とした法的結果である。

それでも亜矢の心に雲ひとつかかかっていないかといえ  
ば、それは嘘。

どうしても、A子の行く末を案じてしまう。  
たとえ今回の誓約が誠意をもって履行されたとしても、  
A子がこの町で暮らしつつづけるのは難しいだろうと思う  
のだ。  
おぞましいセクハラの毎日も悪夢ではなく現実。百年以  
上つづいている連中の日常なのである。  
思想信条ではなく本能の問題。  
生物次元の行動規範だ。  
一朝一夕で改善されるはずもない。  
こんな町は、蘇生するよりも孤立死させるように見棄て  
るのが妥当ではあるまいか。  
歴史の河の流れに沈め、水葬にしていればいい。

二人だけの勝利集会の小宴にて、亜矢はひとり言のよう  
にそう呟いてみた。  
しかし予想どおりの言葉が返ってきた。  
A子にとってこの町は生まれ育ったところだ。いまは亡  
き両親の郷里でもある。このままこの地での生活を続け  
ていきたいというのがささやかな願望だった。なにも悪  
くない自分が出ていくのはそもそも本末転倒ではないの  
か。

そう。まったく、そう。

亜矢もそのセンを念頭に駆けずりまわっていたわけだし、錦の御旗はどう考えたってこちら側にある。A子はたくましく勇敢な女性だった。柄にもなく、不吉な憶測にかられて弱気なことを言ってしまった自分を恥じた。

——といったところで、ツナ缶もビールも残りがなくなった。

さあもう寝るべ。

反省会も報告書も、明日の仕事とすればいい。それから二三日、休暇をとろう。

亜矢は立ちあがり寝室へ向かおうとして、留守番電話のメッセージをまだ再生していないのに気がついた。

メールは旅先で始終チェックしていたが、こっちはすっかり忘れていた。

やれやれと首をふり、電話機のボタンをピッと押す。

『6件です』

電子音声が表示する。仕事上の連絡はほとんどメールを介しておこなっているのだから、固定電話のほうへは十日間でもこんな件数で不思議はない。

友人関係が2件、どこで番号を知ったのか不動産のセールスが1件、そして残りの3件は姉からであった。

3件とも通話時間が数秒にも満たない無音状態で終わっているが、履歴の番号から姉でまちがいないと思われる。

録音の日付は先週の昼間に集中していた。

きっと自分が持ちこんだA子事件の状況が気になったのだろう。

それにしても無言のまま切るのは珍しいことだ。

妹は落研だが姉は新喜劇好きで、留守録にさえ挨拶代わりにのダジャレをかましてきたりしたものだ。

(まあ、お互い学生時代とちがって多忙の身。たまたま余裕がなかったんやな)

しかし彼女への連絡も明日に回そう。

丑三つ時の安眠をやぶってまで、一般家庭に電話をしなければならぬほどの緊急性はない。

亜矢は大きく伸びをした。

ベッドへとびこむためにバスローブを脱いで全裸になる。

スレンダーの身体がタオルケットに包まれるまで、まるいヒップは何度もブリブリとうごめいた。



003. こんどの肉には、GHB、効くでえ。いつもの倍は効くやるなあ。60日もかからんで頭、パーになるんとちがうやるか！

本日二度目の電話を事務所からかけた。  
椅子の背にジャケットをかけ、白シャツの袖を左右とも上腕部までまくりあげて、タブレットやパソコンを叩いている仲村弁護士のならは、そこそこ爽やかには映る。でもそれはうわべだけ。  
亜矢はデスクに肘をついた手でこめかみを押さえた。  
なんだかとても頭が重い。

缶ビール一本で二日酔い？ まさかね。

しかし症状はそっくりだ。疲労が溜まっているせいもあるだろう。風邪気味なのかもしれない。生理はもうすこし後なので無関係。常備しているビタミン剤のサプリメントを飲んでおいた。これで午後までに改善されなければ病院へいくことにしよう。

(姉貴、出ないな・・・)

不在メッセージがスマホの画面に浮かんでいる。案件終

了の報告を朝一でするつもりで、出勤前の時間帯にねらいをつけ——これまでその時刻の応答率はほぼ100%——亜弓家の固定電話にかけたのが二時間前。誰も出なかったのはだからやや意外で、いまは携帯を呼び出してみたわけだ。ギリギリ大学の一時限目の講義が始まる前だろうから電源をオンにしている可能性が高いはずなのに。

(学会でも入ったかな。それとも山ごもり?)

亜弓は論文や著作物を仕上げるためにホテルに缶詰になるときがある。それを山ごもりと称していて、そうやってしまえばなかなか連絡はつかなくなる。

本馬や碧子の携帯をわずらわせるのは、現況ではもう放課後まで待つしかない。

それぞれのアドレスへ『乞う返信』のメールを送信した。

案件の詳細は先輩や同僚の弁護士へもレポートする。若手だからというだけでなく、共有したほうがいい情報がどんな形で眠っているかもわからないからだ。弁護士たちにとって、それはいつか使えるかもしれない『鍵の束』であり、避けるべき『レッドゾーンマップ』なのである。

案件の結果についての彼らの感想は毎回辛辣で厳しいものだ。それは若手の『試練』であり『特権』でもある。一様に指摘されたのは、やはり依頼人にとってその決着の仕方が最良であったのかどうかという点だった。景気のいい凱旋パレードをするのが弁護士目的ではない。依頼人の権利や幸福が取りもどされ永続的に保障されることを、依頼人本人よりも厳密に考えるのが仕事である、極端な話、法律上のフォーマットのうえでは『敗北』だってかまわない。人生において『勝利』であるのなら。

亜矢としてもそこを突かれると、内心忸怩たるものがある。『A子は強い女性だ』というのはただの美辞麗句、独善にすぎなかったのではあるまいか――。

亜矢の実力はこの事務所に所属する全弁護士が認めている既成事実だが、であればあるほど、要求されるものも高みに設定されるということだった。

「まあ、あれだよな――」先輩のうち最も信頼しているひとり、碓井美穂弁護士が言った。「――ケアは欠かさないということなんだと思うな。連絡は密にとること。向こうからはとりにくからうから、こちらから、豆にね」

同感だ。閉塞した共同体には風通しが欠かせない。あの『オネエーチャン』とまだパイプがつながっているという明示があれば、不穏分子が残存していたとしても示談

書に抵触する行動はブレーキを踏まざるをえないだろう。A子の安全にすこしは寄与できるかもしれない。

黒い雲が空を占め、ポツリポツリと生暖かい雨がおちてきた。

雑然とした町の界隈に、人々の小走りが瀬をつくり、傘の開閉が澱みをつくっている。

昼は事務所の近所にある蕎麦屋で鴨なんばを注文した。唐辛子を多めにふって、汗を余計にかこうという目論見。すぐれない気分が依然として続いている。

それでも汁の一滴までたいらげ、麦茶を何杯もがぶ飲みすれば、胸にまとわりつくような、腐るほど熟した果実のジェリーのごとき不快物質がやや薄まってくれたような気もしてくる。

ここで亜弓へまたコール。

またまた不在——。

大学の事務方へ尋ねてみようかと思案したがあまり気乗りしない。亜弓は昨年の学長選挙の際、大学当局とチャンバラをやっていた。

(理由はなんやったかな?)

そうそう、立候補した特定候補への違法な肩入れを組織ぐるみでしたという・・・学生自治を制限する公約を掲げた候補で・・・そんな感じだったか。それ以降ギクシヤクが継続しているはずである。痛くない腹を探られるようなことになってもつまらない。きっと夕方までには連絡がつくのだし。

開店すぐに入った蕎麦屋は昼時をむかえ、混みだしてきた。

背広姿のサラリーマンやOLにまじって家族連れも目立つ。『早よすすらんとノビてまうわ』というオカンの声が聴こえてきたりする。

亜矢は勘定をするために立ちあがった。

報告を終えてしまえば今日はもう早退してもかまわない。

気分転換に映画でも観るか、それとも久々にバッティングセンターか——古い恋愛沙汰の記憶はまだ新しい恋愛のステップにはなってくれていない。

(あき家の美人弁護士かぁ、超ウケねえよ)

まあ、鴨なんばのおかげで、病院行きだけは回避できそうだった。

マンションのロビーでエレベーターを待っていると、管理人に声をかけられた。

生え際の後退した中年男で、愛想はいいのだが、なんだか人を見て態度を変えるようなところのある小人物だ。噂によれば、元は町の土木会社の社長で、会社が倒産して現職になったということだが真偽のほどはわからない。

「仲村先生、ご出張でしたか」

青二才でも金バッチの効力なのか、先生呼ばわりしてくれる。小馬鹿にされているような気もするが・・・。

「ええ、そうでしたが何か」

「お留守中にご来客がありましたのでお知らせしておいたほうがいいのかと思ひましてね」

普通、管理人はそこまでしないものなので、亜矢はかすかに怪訝な表情を見せる。

「ほら、先生の姪御さん、アイドルになってもおかしくないような、目の大きな可愛い娘さん——」

碧子だ。このマンションにはなんども遊びに来ているので管理人とも面識があった。

「——オートロックのところでもウロウロしてたんで、一応、身元は明らかだし中に入れてあげたんですよ。普通はダメだけど、弁護士先生の関係者ということで」  
若干、恩に着せるように聞こえなくもない。

「そうでしたか。それはお手数をかけました。いつのこ

とですか」

「三日前かな。夕方ぐらいです」

「ひとりで？」

「そうです。インターフォンに出ないならお留守じゃないのって言ったんだけど、ちょっと見てくるってお部屋のフロアまで上がっていきましてね。ええ、すぐに戻ってきて、やっぱり誰もいなかったと」

「伝言はありました？」

「いえ、とくに」

表情も様子もいつもと同じだったと管理人はつぶけた。

##### この章の残りは有料本編でお読みください。

#####

004. 亜矢ちゃんはがんばったほうやんか。三日もなびかなんだのは女では新記録かもやん

バイオリズムがちょっと狂っているのかもしれないと、左手に貼りついたバルトリン腺液の糸の引き方をうつろな目で眺めながら亜矢は弁解した。性欲を抑圧する習慣はないが、これほど直情的にカタルシスに至るのは経験がない。おおきな声を止めることもできなかった。

(疲労してたんじゃなくて、フラストレーションが溜まっていただけ?)

肩をすくめる。だったら漫才や落語よりわらってしまうオチではないか。いまから考えれば、胸のモヤモヤはたしかに官能性の熟柿だったのかもしれない。シャワーを浴び、下着を交換すると、完全に身体が軽くなっているのを認めないわけにはいかなかった。

(こんなもん、半島の町のあるゲスどもに知れたら、ニンフォマニア扱いにされてまうわ)

亜矢への誹謗中傷の大半は性生活に対するデマであった。働く女性のビッチ化はあの手の男たちの願望なのだ。

それでも肉体ばかりでなく、頭脳の神経回路も明らかにスッキリしていて、自分でも呆れてしまうやら恥ずかしいやらだ。

(今なら『寿限無』の名前も、いちども噛まずにまくしたてられるんじゃない。ピカソの本名だってコンプリートできそうや)



洗いざらしの黒髪をかきあげながら、亜矢は落研時代、競うように暗記したフレーズを思い起こしていく……。

———来客を告げるチャイムが鳴った。

ウトウトしていた。あわてて時計を見る。

こんな時間に？！

目をこすりながら、インターフォンにとりつく。

マンションのエントランスに備えつけられたカメラからの映像がこちらのモニター画面にうつしだされた。

『……亜矢おばちゃん、亜矢おばちゃん……』

囁くようではあるけれども、切羽詰まった感の声。ほとんど泣き声と言ってもいい声——

「碧子ちゃん！」

桃色のパーカーを着て、そのフードを目深にかぶった顔が画面一杯にあった。

彼女のIDであり、母、亜弓からのDNAでもある大きな瞳が、やや潤んで、充血しているようにも見える。

「どうしたんっ。大丈夫？」

『ごめんなこんな夜遅くに』

「ひとりなの？ ママは？」

『一緒よ。いま車、停めてる』

「そうか一緒か。明日、あなたの家へ行くところだった

んよ」

その叔母の言葉にふと間が生まれた。

『・・・ふーん。やっぱりなあ・・・』

「やっぱりって・・・とにかく早くあがっておいで——」

オートロックを解除する操作をした。

『ほんとにごめんな、亜矢おばちゃん・・・』

エントランスとマンション内を隔てる扉がひらき、両手のつっこまれたパーカーと、ヒップの詰まったジーンズのうしろ姿がそこへ入っていく。

深夜に母娘での訪問・・・。

長すぎた音信不通の結末としては、理由の重大性がクローズアップされてくるばかりのような気がする。

(ん?)

モニター画面に、あらたな人影がさしこんだのを視界がとらえた。

コンビニの袋を肘にかけた碧子の背後に、さっと追いつき、開放された扉からつづいて入りこもうとしている緑のスタジャン男——顔は確認できないが身体つきや金髪に染めた頭からして若者だろう。

『共連れ』だ。

##### この章の残りは有料本編でお読みください。  
#####

005. ふん、ヒリ出してる最中、アクメやらかしたや  
ろう。それも一回やないな？ 最低人類や！

廊下の奥からゴム底を引き剥がすようなスニーカーの足  
音がしてきた。

亜矢は通路へ飛びだし、名前を呼びかけながら手をふっ  
た。

それに気づき、碧子も小走りになって、叔母のもとに駆け  
寄ってくる。

「・・・亜矢おばちゃん・・・」

それだけという言葉が途切れる。声が疲労に満ちてい  
た。

どういう経緯があったにせよ、また、どういう種類かわ  
からないけれど、彼女が苦悩の中にいることは明白だっ  
た。

「オーケー、オーケー。もう心配いらへんで」  
身体を力任せに抱きしめる。

「おでんが飛びだしちゃうよ亜矢おばちゃん！」

ポリ袋の中身のことを言っているらしい。

「ちゃんと顔を見せてみ。話はそれからや」  
自分より頭一つひくいパーカーのフードを勝手にとりのぞく。

シャワーをあてられた小猫のように、碧子は覗きこんでくる亜矢の視線から顔をそむけようとする。

「あなた、顔、腫れてるわ」  
イヤイヤと上体をねじる碧子。しかし両頬とも——若干ではあるが——本来のフェイスラインとはちがう『熱』を孕んでいる感じだ。

「・・・太っただけだもん・・・」  
ちらちら上目遣いをして、亜矢の表情を読みながら見え透いた嘘を口にしてきた。

「ほっぺただけ都合よく太るわけないやろ」  
手の甲でかるく触ろうとすると、碧子はギクリとしてのけぞった。殴打の恐怖がフラッシュバックしたかのような先鋭反応だった。弁護士職につくものとして、これとよく似た症例と何回か遭遇したことがある。体罰にさらされつづけ保護された少年・・・DVから逃れてきた女性・・・PTSD：心的外傷後ストレス障害だが、昂じると脳の海馬という部位に萎縮が生じる。そこまで顕在化すれば、近傍で手を持ちあげただけで身体が過緊張に陥ってしまうことも容易に起こりうる。  
同様の反応がこの最愛の姪にも存在していた。

「誰に殴られたの。話しなさい」

可憐な両肩をつかみ、きつく質問する。日頃は自分の味方ばかりしてくれる優しい叔母の剣幕にショックを受けたのか、しゃくりあげ始めた。

「・・・太っただけだもん・・・」

「そんなデマカセばかり言ったら外へ放りだすよ。私が『やる時はやりすぎる女』だってこと、知ってるやる」

涙の風船が割れる。碧子は亜矢にしがみついた。その胸へ顔面を押しつける。

「心配すること、ひとつもないって。亜矢おばちゃんはスーパーレディやん。どんだけピンチでも助けてやるわ」

抱擁が数分間つづいた後、ようやく号泣が半べそに収まった。その嗚咽の中で、碧子は声をしぼりだして言った。

「・・・ママ・・・」

「えっ、誰？」

「・・・ママに・・・殴られた・・・」

ふるえる肩をつかんでいた指が固まる。

(どういうこと)

あの姉が体罰・・・。

ありえない話である。

その手の教育方針こそ誰の面前でも唾棄する思想的立場にいた亜弓なのだ。どんなに切迫した事情があっても思いとどまるにきまっていた。

ただしこの様子からみて『嘘』のカサブタはまだ乾ききっていない。強引に剥がせば痛々しく出血してしまうだろう。

「・・・それで・・・家出してきたの・・・ううん、ママは一緒じゃない・・・そう言わないと入れてもらえないと思ったから・・・三日前？・・・うん来たよ・・・今日とおなじで留めてもらおうと・・・ママの次は亜矢おばちゃんだから・・・わ、私を理解してくれる順番のことやけど・・・」

「なるほど——」彼女の肩を改めて抱きしめる。「——そのつづきは部屋でな、おでんの種つつきながら、ゆっくり話そ」

いずれにしても、この年齢の者へのプロフェッショナルな事情聴取は細心の注意を払ってすべきだった。

「そういえば——」亜矢はふりかえり、ひっそり閑とした通路の向こうへ視線をやった。「——このマンションの入り口で、ヘンテコな集団に囲まれへんかった？」  
目をパチクリする碧子。まもなく事情を合点して、首を横にふった。エレベーターには一緒に乗らず、通路の奥へ歩いて行ったという。

「・・・話しかけられもしなかったよ・・・」

「そっか。おばちゃんを取り越し苦労やったか。ごめんな。法律の世界なんてのは人を信じたり信じなかったり、ややこしいところや」

そう言いながらも、亜矢は一階の通路の奥になにがあったか、思いだそうとしている。機械室とか管理人の休憩室とか・・・しかしとっくに人気はなくなっている時間帯のはず。その他に考えつくのは、裏口から西側の路地へそのまま出ていく、近道としての通り抜けだが、さてどれほどの時間短縮が期待できるだろう。マンションの法律アドバイザーとしては看過できぬ事例といえる。

「・・・ふーん・・・因果なんやねえ・・・弁護士先生って・・・」

碧子はこれまでのように軽口を叩き合って和みたかったのかもしれない。でも声に元気がなく、表情も硬かった。亜矢は即座に大アマゾン集団への推理を頭から追いだした。いまは意気消沈している姪っこの心身を温めるのが先決だ。

##### この章の残りは有料本編でお読みください。

#####

006. イタチの最後っ屁か。お前の妹はずいぶん意地汚い女なんやな、あん？ 土鳩！

碧子はパジャマ代わりのスウェットに着替えている。

「早く寝ようよお——早くう——明日休暇なんでしょう——そんな勉強なんて後回しにすればいいやん——」

スウェットを貸したため、自分は例のボディスーツに手足を通して、自分は例のボディスーツに手足を通して、座布団の上にあぐらをかいて、就寝前の日課である法律関係の購読雑誌チェックをこなそうとしている。

「こらこら、先にベッドに入ってて。すぐに行くからな」

右から左からまわりついてき、今はそのすっきりとした首に背後からしがみついている姪の、甘えた増長を優しく叱る亜矢。スキあらば脇の下から頭を突っこんでこようとまでして困らせる碧子。シャワーをすませ、寝間着姿になると、肩の荷でも下したように、ますます退行した言動をはびこらせた。

「亜矢おばちゃん、読書の時は眼鏡かけるようになったの。老眼？」

「アホ。ちょっと乱視やねん。こんなバリバリの若手つかまえてババア扱いはやめ」

「でも黒縁眼鏡やし、下着もダッサダサのババア色やし。それになにコレ——」



彼女がつついているのは、亜矢が就寝用にロングヘアをまとめるため使っているソックスの結び目だ。

「——靴下の指切って、髪を通しての？」

「笑うな。これが一番、合理的なんだなあ。寝相悪くてもほどけないし、安いし、簡単だし」

1 / 2 作戦の応用だが亜弓の直伝ではない。短髪の姉にはこの必要性はなかった。亜矢自身による女性誌からのリサーチである。本来は巻き髪を作るためのスキルらしいが・・・。

「そんなこと女子力あきらめたババアしかやらへんわ。恋人も愛想尽かすババアや」

「コラ、どこに手を回してるんや」

碧子の両腕はいつの間にか亜矢の胸を抱きしめている。

「嘘やでえ。亜矢おばちゃんはモノホンのベッピンさんやでえ」

大人の女性の肩の筋肉に、思いきり頬ずりしながら、あえかな鼻息すら漏らす。

「モノホン？ そんなつまらん言葉、使ったらあかんよ」

たしなめを無視して、鼻面をこんどは首すじに押し当てる。

「ああ、いい匂いや。ママのとちょっとしかちがわん匂いや」

亜矢は胸に疼痛をおぼえて奥歯を噛んだ。碧子の両手が

ボディースーツの成形カップごとわしづかんできたからだ。たいした握力でもないはずなのに、ジーンと芯まで刺すような疼きが走った。お乳が固くなっていることに気づかされる。こんな現象は、生理の始まる前と性欲亢進の最中と、妊娠でもないなら起こるタイミングはそのふたつだろうが、前者はまだ先の話であり、となるとあの口惜しい感覚ということになってしまうが・・・。

(・・・さっき、あんなに深いのを済ませたばかりで?・・・)

雑誌のページをめくる指がとまっている。

黒縁眼鏡がずり落ちて鼻眼鏡だ。

かつて経験したことのない己の肉体のオーバーフローに、唇のまわりに小汗が浮かんでくる。

「チチのナリも、ママとおんなじスジなんだよねえ」  
耳に吐息が吹きかかった。耳裏からうなじにかけた敏感帯が背肌をざわつかせる。平素にくらべ、その刺戟感は坐骨神経にまで達するようだった。紅葉手を卒業したばかりのような碧子の掌が、自分の乳頭のしこりをどう感覚するのか、亜矢はわずかに焦燥した。

肩の上に小顔のアゴをのせてくる姪を横目で盗み見る。こんなことで自分への尊敬の念が幻滅に変わってしまうなら悲しいばかりだ。

彼女の意識を肉体からそらすために、めずらしく『お説教』をしてしまう亜矢。

「・・・チチ？・・・ナリ？・・・スジ？・・・どうもさっきから言葉づかい、変になってきてるよ」

「そうかなあ。普通だと思うけどなあ」

「・・・悪い友達と付き合ってるんじゃないでしょうね」

「もーお、ママとおんなじこと言うたら減点やでえ」  
拗ねたように眉をひそめながら、亜矢の横顔に自分の横顔をきつく重ね合わせると、密着した頬肉に目尻が食いこむほど首の力を入れてきた。無邪気な笑みと持てあまし気味の苦笑が押しくら饅頭だ。ルーージュを知らない唇とフレンチキスを知っている唇も、口角をぶつけあう。

「・・・げ、減点？　どんだけ上から目線や」

たしかに碧子の物言いは変調をきたしているようではある。あっけらかんとしているものの、素直で俗世に染まっていない伸び伸びとしたボキャブラリーの『使い手』だった。

本物の教育ママなら、まだまだ意見を聞かせるであろうところ、亜矢はかるく碧子のおでこを叩き、その抱擁をとくにとどめた。

正直にいえば、その『余裕』がなくなっていた。

立ちあがったとき、腰がストーンと落ちかけて、あやうく尻餅をつきかけている。

下半身がふぬけの状態に。その原因が目に入れてもえ  
くない姪の『いたい気』なじゃれつきとは不覚の一語  
に尽きるではないか。

(一時戦線離脱や)

亜矢は壁に手をつきながら、這々の体でキッチンにたど  
り着いて、ミネラルウォーターをコップになみなみと注  
いだ。

どうも最近、産婦人科系が変だ。

##### この章の残りは有料本編でお読みください。  
#####

007. なんどでも言うで。お前は負けた。お前は負け  
た。お前は負けた

それも『入り口』から、さっきの倍の性急な情感の上昇  
ではないか。

めんこい頬っぺたの気まぐれな動きにこねまわされ続け  
ている右の乳頭部――

しゃべるたびに、亜矢おばちゃんを仰ぎみるたびに、あ

くびをするたびに、耳を押しつける代わりに鼻面やアゴを押しつけるたびに、異なる刺戟を挿しこまれ、かつて元恋人に吸われたときと瓜二つの高潮をなしていた。左の乳頭部だって釣られないわけもなく、汗を描きはじめていたところへ、わしづかみがきた。

碧子の握力は恐ろしいほどジャストフィットしている。強すぎず弱すぎず、カップの生地越しに胸乳を搾ってくる。

「・・・碧子ちゃん・・・もうそろそろ・・・な・・・眠らんと・・・」

退廃の予感に慌てつつ、なんとか碧子を傷つけないまま状況を回復できないか、足搔いてみる。

「ママは寝ないでつきあってくれるよ毎晩」

「・・・毎晩？・・・」

「碧子にこれをされないと眠れない身体になってきてるんだって」

「・・・なんじゃそりゃ・・・ママは入院してるんじゃないかったんか・・・」

「アハハ、さすが弁護士やなあ亜矢おばちゃん、揚げ足とるのうまいわ。いまのは入院する前の話や。っていうか、そんなことどーでもいいことじゃん。うるさくせんと心臓の音を聴かせてちょうだい」

諭すだけでは一向に埒があかないようだ。かえってピシヤリと皮肉られてしまう。

乳首が、疼きとともに硬化しているのがわかる。同時に、赤く発色するのが体質だ。照明を落とした寝室でも、目と鼻の先にある大人の女性の切ない変化を見咎められる危険性があった。

そろそろ実力行使をつかうべきかもしれない。

「・・・ちょっと洗面所、行ってくるからいったん休憩な・・・」

そう言いながら腹筋を起こそうとしたのに、軽いはずの碧子の体重をまったく持ち上げることができなかった。

「むりむり。いまは動けんよ」

「・・・なんで・・・」

「私が金縛りの術をかけたからや」

くすくす笑いが薄闇に聞こえてくる。

「亜矢おばちゃんが私から逃げださないようになあ」

「・・・うーん・・・」

手足も高熱病を患ったように脱力していた。これではたとえ重ね餅になっていなくても起きあがれそうになかった。

(どうということ・・・)

むろん金縛りなどであるわけがない。

感覚的に似ているものとして思いつくのは、長時間、慣れない正座をした後、足が痺れて立ちあがれなくなる、

あの現象くらいだが、今夜の事態に原因として類似性があるとは言えなかった。

(・・・まさか・・・一服盛られた・・・)

亜矢は自分の左半身にぴったりと密着する碧子の気配を全身で探ろうとする。

ここにきて、頭部や腕以外にも身体を侵犯してきていた。スウェットのズボンの足がボディスーツからむきだした素足に絡みつき開脚を強いている。突きだされた膝小僧は太腿のあいだへ楽々と入りこみ、その無防備な内側を股間へむかって這いあがってこようとしている。

亜矢は唇をうっすらとなめた。

痺れ薬が体内に回ったのならすべての進行を合理的に説明できそうだったが、しかし動機が思い当たらない。容疑者はこのキュートな姪っこ以外にいないのだから。

「・・・碧子ちゃん・・・おばちゃん気分がすぐれないから、ちょっとどいて・・・」

たしなめるその声もおどろくほどハスキーになっていた。

「どいてもいいけど動けないし。私の施術と亜矢おばちゃんの性欲がミックスして、もう腰を抜かしてんねん」

「・・・ア、アナタ・・・なに企んでるの・・・」

##### この章の残りは有料本編でお読みください。  
#####

008. 100回200回、恥かかなきゃ世間はひとつも許しちゃくれねえんだよわかってんのかこのドブス！

・・・・・・・・いまは何時だろうか。

朝に気づいた目覚めとおなじように、意識をとりもどした亜矢が最初に想ったのはそのことであった。

しかし枕元から伸ばした視線の先にあるはずの、本棚の二段目に置いているデジタル時計が見当たらない。

まばゆい明光——明光！？——が照らしているのにだ。

代わりに見えたのは銀色の蛇口——蛇口？！——たしかにレバーのような水栓金具だった。

自分がベッドのなかで、タオルケットに包まれているのではないという現実を、逮捕状のように鼻先へ突きつけられた。

(・・・・・・・・なにこれ・・・・・・・・バスタブ！？・・・・・・・・)

そう、ここは浴室であった。

亜矢は横たわっていたのではなく座っていた。



からっぽの、真っ白な浴槽の中に、いわゆる体操座りの格好で、ボディスーツのまま……。

四方の壁、天井、そして床——

あたりを見まわし、目をうたがった。  
ユニットバスのなめらかな白面はすべて、デコボコしたスポンジ質の表面をもつテクスチャーに置き換わっているのではないか。それもやはりホワイト一色とってよかったが、デコボコがつくる陰影のため、目の回るような幾何学模様を織りなしていて、清潔感というより病的な印象を放射している。

——亜矢はギョツとして手首の感触をたしかめた。

膝を立ててそろえた体操座りであることはその通りなのだが、両腕は膝を上から抱えるのではなく、膝の裏にさしこまれ、腿を抱えるように組まれていた。  
その両手首に、金属の手錠がきつく嵌っている……。手錠の造りは本格的で、両手をもがかせても、壊れそうな気配はまったくなかった。そもそも輪を連結する太く短い銀鎖により、手首の動きは頑丈に封じこまれている。

ここが自分の1LDKの浴室であるかどうかは・・・たぶんそうだろうとしか言えなかった。

##### この章の残りは有料本編でお読みください。  
#####

009. オマエの罰当たりな妹がまたグズグズ角を立ててるぞ！　なんか言ってやらんでええんかい、あん？

ボーイッシュな髪型はトレードマークだし、明るくはつきりとした目も、浅黒い肌も、活動的な彼女の人間性をいつものように主張している。

ただし、その笑顔の性質はハゲ兄の破顔一笑とは異なり、石膏細工のような『ニコつき』にとどまっていた。そのうえ身につけている衣裳にはアンバランス感をおぼえずにはいられない。

ピンク色のタンクトップ？！

肩ひもが極細であるため、デコルテの露出が激しいデザイン。バストの谷間すら覗けんばかりなのだ。彼女の上半身のプロポーションには窮屈すぎるサイズであるのも

奇妙であり、目をこらせば、乳頭の突起がポツンと透けてまでいるではないか。

学者という自由な世界に籍をおく亜弓が、常識や格式に縛られない生活スタイルを貫いているのはたしかだが、どうみてもチンピラとしかおもえない男とのツーショットに、こんな扇情的な衣装を選択するはずがなかった。

(・・・というか、そもそもこの手の男たちと接点があること自体、ありえへん・・・)

犯罪事件に深く関わる自分のような弁護士ならともかく、である。

「へへ、どや、相性バッチリやる。土鳩だから下付きでなあ。おまけにおれの『名刀正宗』に小便ひっかけてくるようなバチ当たりだが、毎晩、腰ぬかして便所にも這っていくしかないようになるまで可愛がってやってるから心配すんな」

ハゲ兄はカッカッカと楽しげに喉を鳴らす。

「姉妹そろってお盛んなこっちゃん」とスタジャン野郎。サロペット力士も加わってくる。

「でもそのおかげで、土鳩のDVに苦しんでいたミジンは救われたんだからなあ。ハゲ兄の政宗は正義の真剣っちゅうことだぜ」

「ウリ坊、お前チャレたこと言うようになったじゃねえ

か。デブのくせして文武両道やな」

「コンゾーみたいな『猿のオナニー人生』と一緒にすんな。これでも高校は半年かよってんだから」  
——ウリ坊?! ——は関西弁ではないようだ。すぐに金髪が口をとがらせた。

「なにいうてんの。おれだって学校ぐらい入ってるわ。ま、入学したのは男子校でも、通学したのは女子校の敷地の中ばかりやったけど」

下劣な洪笑をふかしつつ、三人は互いの肩や背を小突きあう。

この救いようのない愚かさは教養や学歴の有無に根ざしているのではなく、もっぱら本人たちの人格形成の未成熟さに起因するものだと亜矢は直感する。が、重要なのはそんな問題ではなかった。

「・・・姉を・・・レイプしたのね・・・」

亜矢が鋭い視線を放ったのは、三人のゴンタクレどもではなく、彼らを束ねているとおもわれる甚平女のほうだった。首謀者はこいつにきまっている。

##### この章の残りは有料本編でお読みください。

#####

010. この女、流産したてやからな。女の身体ってのは子宝をなくすと、スペアを身籠るための発情がすぐに整ってくるもんや

「オカンを悲しませたらあかん」

ハゲ兄はそういいながら、いつもは亜矢の裸のヒップをのせている、浴室用のプラスチック椅子を白短パンの尻に敷いて腰を落ちつかせた。

蛇口を開放し、冷水でハンドタオルを濡らすと、きっちり絞りと絞り、それを右頬へ押しつけた。

痛みに触れられて、亜矢は反射的に身体を伸びあがらせ、すぐに意識的に顔を背けた。

「冷やसान腫れるで。まあ内出血まではしてないけどな。せっかくの瓜実顔が狸顔になったら興ざめやんか」もういちどタオルをさしだすも、亜矢はふたたびその手から遠ざかるように首をねじ曲げる。それでも拘束された姿勢では自由度も限られていて、身をすこし乗りだしたただけのハゲ兄の『好意』どおり、タオルをぴったりと押し当てられた。

もちろんひんやりとしたその感触は、まだ薄赤く火照っている頬に心地よかった。

「口の中も切れてへんやろ。そのへんはオカンの律儀なとこや。暴力と躰をきちんと使い分けてる。ただの暴力やったら掌ビンタやけど、いまのは躰やから指四本のビ

ンタヤ」

亜弓の新しい亭主だと吹聴する中年男は、ほっぺただけでなく額やアゴにもタオルを回し、ムツとしている瓜実顔を拭いていく。

「ほらみい。スッピンでもこんなにベツピンやんか。女の肌はいつでも磨いとくもんや。どこで運命の人に出会うか、わからへんよってに」

「・・・さわらんでいい・・・手錠を外しなさい」

依然として基本の方針を変更するつもりなし。最初の要求を固守することで妥協する気のない意思を表明しつづける。これを維持できるなら洗脳だって入り口止まりということになる。

「さわらんでいいことあるかい。妹が雪隠詰めになっただ。手エさしのべん兄がいるか」

「だったら手錠を外しなさいよ。妹を監禁する兄がどこにいるの」

皮肉な笑みを浮かべながら亜矢はまぜっ返す。

「へへ。また顔をひっぱたかれないか。囁きすぎると躰の対象やぞ小雀」

「小雀小雀うるさいわ。ハゲ兄、ウリ坊——もうひとりは何だっけ。まあいいわ——これもミドルネームとかいうやつや？」

「そうだ。ミドルネームや」

「ミドルネームって洗礼名ってことだけど、あなた方は

キリスト教徒なの」

「つまらんとこにツッコミ入れてくるなあ。洗礼は洗礼でもそっちの洗礼やない。『アウェーの洗礼』の洗礼や。オカンの洗礼を受けた人間がありがたく戴くネームっちゅうことやな」

「オカンの洗礼?! なにそれ。私はいつそれ受けたんや。ずいぶん前から小雀小雀いわれまくってたけど」

「アホ。小雀はミドルネームやない。ただのあだ名や。オカンがつけたもんでもないわ」

「だれの作？」

「土鳩にきまっとる」

「————っ」

からかっているつもりが切り返された気分。馬面も憎たらしくせせら笑いだ。

「土鳩はお前のこと、ぜんぶしゃべってんで。洗いざらいぜーんぶな。おれとのナイターは長いからなあ。合間に挿む寝物語も数えきれんほどや。おかげでお前の生理の周期から失恋の数まで、いまじゃ家族全員が情報共有してるっちゅうわけや」

ハゲ兄がスラスラ口にしたそれらの数値は鼻白むほど正確だった。

ニタニタする馬面を、突き刺す亜矢の視線にありったけの敵意がこめられる。

覗き見行為にただ憤怒しているのとはちがう。

そんなことを知っているのは亜弓しかいないのだ。そして亜弓が妹のナイーブなプライバシーを簡単に他言するわけもない。

「おー怖っ。さすがは法廷で演技力鍛えてるだけあんなあ。気高き女弁護士ぶりが板についとる」  
声を立てずに大笑いするアロハ男。南国の海のようなブルーの柄がムカつく。

##### 以下は有料本編でお読みください。

#####